

田原史起 著

『草の根の中国——村落ガバナンスと資源循環』

(東京大学出版会、2019年)

評者 阿古 智子

中国農村で長年フィールドワークを続けてきた著者(田原)が、自然村と行政村の配置や世帯数の異なる山東省、江西省、貴州省、甘粛省の4村における草の根のガバナンス(さまざまな共同行為)の実態を鮮やかに描き出した。(1)生態領域=物質生活の整備;象徴領域=精神生活の充足、(2)「つながり」(小規模、親密圏、利益共同体の「内部結束」);「まとまり」(中規模、複数の親密圏を橋渡しする原則性・理念性)という2つの軸を設定した上で、公——政府からの資源の投入、共——村の共同体や血縁関係、私——民間企業などの力がどのように相互に影響を及ぼしているかを明らかにしている。「つながり」は関係資本であり、父系同族の宗族や自然村レベルを範囲とするのに対して、「まとまり」は団結資本であり、複数の自然村から成る行政村及びその外に連なる人脈が包摂されるという。「まとまり」が動員されるためには、農村リーダー、集団経済、民間組織、文化的要素などの条件が必要とされる。

本書の構成は以下の通り。

序 章 草の根から中国を理解する

第1章 「譲らない」理由——農民の行動ロジックの変遷

第2章 「つながり」から「まとまり」へ——村落ガバナンスとその資源

第3章 社会主義農村の優等生——山東果村

第4章 出稼ぎと公共生活の簡略化——江西花村

第5章 人材流出と資源獲得——貴州石村

第6章 小さな資源の地域内循環——甘粛麦村

第7章 比較村落ガバナンス論

終 章 草の根からの啓示

調査対象地のうち、山東半島の煙台市に位置する果村は、社会主義時代の集団経済を引き継ぐ地場産業を有している。人々は行政村単位で集住しており、農地の灌漑、飲水の確保、定期市の整備などにおいて地縁の関係が役割を發揮している。そうしたなかで、社会主義の遺産である「集団」が自律的なガバナンスを可能とし、「我々果村」というコミュニティ意識を育み、行政村大の「まとまり」が醸成されたという。

江西省余干県の花村(行政村)は各集落(自然村)の規模が小さく、分散している。祠堂を持つほどの大きな宗族は存在せず、「まとまり」は弱いが、「つながり」がガバナンスを担保している。青壮年層のほとんどが出稼ぎに出ているが、血縁ネットワークが機能しているため、留守児童(親が出稼ぎに出て農村に残される子どもたち)は「問題」にならないという。

埋葬は一族の「公共事業」として行われ、一族の記憶が紡がれていく。一方、集団財産が乏しく、行政村は影が薄いため、「まとまり」の範囲で担われる道路建設などは簡略化されている。私立学校が公の不足を補う形で運営されている。

山岳地帯で血縁ベースの小集落が中心の貴州省晴隆県の石村では、行政村のリーダーはガバナンスにほとんど関与せず、コミュニティの外で活躍する人たちが村に残る人たちを支援していた。つまり、外部からの資源が地域振興の鍵を握っていた。

国の貧困救済事業の対象ともなっている甘粛省西和県の麦村は、集団経済がほとんど発展せず、宗族や家族のつながりも希薄な「資源欠乏型」のコミュニティだが、人民公社時代から「機動地」や「報酬地」として保留されている山林や農地、小学校校舎などがコミュニティの共有財産として活用されてきた。村集団に直接の収益をもたらす「収益型財産」に対して、麦村の人民公社からの遺産は「基盤型財産」だという。家神廟信仰などの宗教文化を維持する一方で、行政レベルでの「まとまり」を欠き、都市の政府部門や企業にポストを持つ外部の人々が「第三の力」となって道路建設などに貢献していた。

田原はこの4村の事例を通して、自然村の範囲で問題を解決する傾向が強い場合は、血縁やインフォーマルなネットワークの役割が大きくなるが、自然村と行政村の範囲が重なっているか、あるいは人口が中心村落に集中している場合、行政や村の指導者を通して問題解決を図ることが多くなると見る。さらに、「つながり」のコミュニティに依拠するガバナンスは、小規模だがコストがかからず、「まとまり」のコミュニティに関わるガバナンスでは、複数の異なる親密圏を橋渡しするような「原則」が必要になると分析する。人民公社時代には社会主義の価値観が「原則」を提供してきたが、今の中国において、そうした「原則」は、集団経済、農村リーダー、民間組織、文化的要素などが担っている。そして、物質面の整備を行う生態領域と精神生活の充足を図る象徴領域は相互補完的、相互作用的に循環しており、それによって、農村のコミュニティがそれぞれ独自のガバナンスを実現しているのである。

このような田原の村落ガバナンスと資源循環に関する考察は、長きにわたって地道に調査活動を続け、蓄積した詳細な記録をもとに導き出したものであり、示唆に富むものである。本書が一般社団法人アジア調査会の「アジア・太平洋賞」大賞と連携組織地域研究コンソーシアムの研究作品賞をダブル受賞したのも、各界から高い評価を受けているからであろう。そうした前提を置きながらも、以下では、主に私が行ってきた参与観察やエスノグラフィーの視点から、本書について若干の批評を行いたい。

本書は序章で、「従来の中国認識や中国研究に一番欠けていたのは、社会の最末端にありつつ人口の大部分を占めてきた農民に対する学問的考察や内面的理解」(p.3)であり、「メディアを含めた中国論が“発展の裏側に取り残された悲惨な農村”イメージや、“点”の部分で生じる貧困、暴動、陳情、そして地方・末端幹部の腐敗、土地収用をめぐる衝突などの目立った現象や事件をセンセーショナルに、針小棒大に伝えようとする傾向をもつ」(p.3)と述べている。正直に告白すると、貧困や陳情、強制立ち退きなどに注目してきた私は、自分の研究にも批判が向けられているように感じてしまった(例えば、阿古 2014を参照)。しかし、本書は私のこれまで書いてきた論文や著書を引用している訳ではないし、どの学術研

究にどのような問題があるのかを具体的に示していない。

民主主義国家において、メディアが社会問題を積極的に取り上げ、政策を批判するのは、権力の監視機能を果たすという意味において当然のことである。昨今日本ではヘイトスピーチに加担するような中国報道もあり、それらに問題があることは確かだが、さまざまな意見や見方があるからこそ民主的な議論が可能となるのであり、言論統制を強化する中国の官製メディアによるプロパガンダ（宣伝）と、言論の自由を基本とする民主主義社会におけるジャーナリズムとは根本的に異なる。

なんとなく日本社会に広がっていると感じられるいわゆる「反中的」な空気やメディアの報道に反発する形で、田原が問題意識を形成したとすれば、学術研究を行う姿勢としては不十分である。

さらに、「発展」や「民主」の見方に関して色眼鏡やプリズムを通してではなく、「直接、自分の目で見、その等身大の姿を浮き彫りにする」(p.4) ことが本書の第一の目的だといのだが、中国の出稼ぎ労働者のコミュニティや農村で参与観察を手法とするエスノグラフィーを行なってきた私からすると、「自分の目」にこそ偏見（バイアス）があるという認識が重要だと考える。

私が香港大学で学び、現在も取り組んでいるエスノグラフィーでは、研究者は研究対象である人や組織と関わりを持ち、さまざまなことを感じ、考え、理解する中で、常に意識して自らの立つ位置を確認する。研究者と研究対象の関係はさまざまな要因によって変化する。それゆえ、研究者と研究対象の関係を考える際には、それぞれが所有する資源や権力、コミュニティのメンバー或いは一時的な居住者として果たすべき役割、それぞれの間に生じる感情が調査に与える影響などを十分に考慮しなければならない (Lecompte & Preissle and Tesch 1992)。

さらに、研究者は参与観察において自らのポジションを確保するためにインサイダーとしての役割 (insider role) を持つが、それが研究のプロセスにどのような影響を与えるのかを敏感に察知する必要がある。研究者は自分の文化と研究対象の文化、インサイダーとアウトサイダーの文化の間を行き来するなかで、さまざまなジレンマに直面する。さらに、研究対象のコミュニティにおいても、一方のグループに組みすればもう一方のグループの信用を失うこともあり、研究者はそれぞれのグループの周辺にいるしかない。「フィールドワーカーはいずれのグループにおいても主力にはなれない」(LeCompte, Preissle, and Tesch 1992: 103) が、なんとか参与と観察のバランスを調整しながら、内部者の視野を理解しようとする。とはいえ、このような質的研究においてはどうしてもバイアスが強く出てしまうため、自己のポジションに注意を払い、自分は何を、どのように見ているのかを明らかにした上で、見えていないものがあるということを意識しなければならない。

だから、私は論文や著書を書く際に、主語を「著者」や「筆者」と三人称にはせず、「私」という一人称で記すことが多い。また、研究対象である人々や組織と私がどのような関係を構築したのか、その関係はどう変化していったのかを明らかにするようにしている。

一方本書は、所々で「私たち」という主語を使っているが、これは誰を表しているのだろうか。第一章の書き出しは、「私たちがこれから分け入っていこうとする……」となっているが、これは一緒にフィールドに入った調査協力者と共同の視点であるということなのか。ホームステイをして村で調査を行ったというが、村の人々との関係をどのように構築

したのかは具体的には記されていない。

もちろん、本書は中国の農村社会の特質をとらえようとしているのだから、私が行なってきたアクション・リサーチ型の参与観察を手法とする必要はないのかもしれない。ただ、中国の農村に分け入って、その底辺を見ようとしてきたことを強調している割には、私には農民の言葉があまり聞こえてこなかった。特に、観察した事象を抽象化・理論化していくプロセスにおいて、研究者の価値観が強く反映されすぎているように感じた。

エスノグラフィーでは、異なる文化の狭間を行ったり来たりする中で、エミック (emic: 研究対象=インサイダーの視野や解釈) とエティック (etic: アウトサイダー=研究者が設定する分析枠組に基づく解釈) を意識して記録や分析を行うことが重要になる。つまり、エミックの観点から見える具体的な事象を、エティックの観点から研究者が分析・整理していくのだが、エスノグラフィーは、エミックとエティックのどちらか一方が欠けても成り立たず、そのバランスは研究の性質によって異なる。それゆえ、本書が選択したバランスについて、私が異論を唱える必要はないのかもしれない。

しかし、どうしても違和感が拭えないのは、当事者の声を広く集めていないにも関わらず、留守児童は「現地 (江西省余干県の花村) のコンテキストでは“問題”としては捉えられていない」(p.118) といった記述が見られるからだ。私の教え子は東大の修士課程を修了してから、期限付きではあるが、福建省の農村の小学校で教師になることを選択した。2022年2月にもらった彼女からの便りによると、留守児童の多くがコンピューターや携帯のゲームにはまってしまい、学習への意欲を維持できないという。別の教え子は上海の中高で学んだが、安徽省の戸籍を持っているため大学入試を上海で受験できず、その不平等な戸籍制度と入試制度に苦しんだ自らの経験から、現在、留守児童の心の問題をテーマに修士論文を執筆している (注: 地域の経済格差が大きい中国では、大都市の戸籍を得ることは難しい。大学入試は戸籍所在地で受験することになっている)。

とはいえ、本書が取り上げた余干県では事情が異なるのだろうかと思い、中国のインターネットサイトで調べてみた。「人人網」(renren.com) には中国各地の政策文書やレポートが掲載されているが、2020年11月16日に余干県第二中学の譚玲麗校長が投稿した「余干県第二中学留守児童調査報告」(<https://www.renrendoc.com/paper/102750981.html>) によると、同中学の2,000名以上 (全校生徒約4,500名中) にのぼる留守児童のうち、およそ90%が祖父母に世話してもらっているが、その他の親族のケアを受ける児童、大人は家におらず兄弟姉妹で助け合って生活する子どもたちもいる。親の代わりに農地を耕さなければならないという子どももいるし、多くが心理面の問題を抱え、集中して学習に取り組めないという。祖父母に甘やかされる子どもや、ゲーム依存や喫煙、飲酒、窃盗などの問題行動を起こす児童 (約10%) もおり、怪我や事故に巻き込まれたり、病気になったりすることも少なくない。当然、親族や祖父母では親の代わりは完全には務まらないだろう。私は教育学部で学んだこともあり、留守児童については関心をもって調べてきたが、現代中国における深刻な社会問題であると捉えている。

他に、「スラムも形成されず、極めて秩序だった農民工の還流が都市=農村間に形成されているのは、その背後に、すべての農民世帯が小さくとも必ず一片の農地の経営権を保有しているからだ」(p.237) といった説明も、近年論争になっている中国の情勢を考えると、必ずしも当てはまらないのではないだろうか。2017年11月には、北京郊外で「危険な住

宅を一掃する」という理由で寒い冬空の下、一斉に出稼ぎ労働者が強制排除され、「低ランク(低端)人口」という言葉がソーシャルメディアで使えなくなった。学歴の低い労働者を狙い撃ちしているとの批判が高まったからだ。「城中村」(都市の中の農村)という中国語があるように、中国の多くの都市に出稼ぎ労働者が集住するエリアがあり、労働者たちは定期的に排除されてはまた舞い戻ってくる(阿古2016)。農村に戻るべき土地があることで、路頭に迷う農民を減らしている側面は確かにあるだろうが、農民が主体的に農村に還流することを選んでいくかという、必ずしもそうだとは限らない。「問題」の捉え方は人それぞれであり、地域の特質を全体として捉えるとしても、当事者の声を丁寧に聞くことなくして、そう簡単に断定することはできない。

田原の少なからぬ分析は、中国農村研究における「華中派」と呼ばれる武漢大学社会学学院院長の賀雪峰らのグループに影響を受けていると思われる(例えば、田原が引用する賀2017などを参照)。私は10年以上も賀雪峰らの農村調査チームに入れてもらっていたから、それがよくわかる。彼らは行政村と自然村の関係、村の規模がガバナンスに与える影響、東西南北の農村の地域差、社会主義時代の流れを汲む公共インフラや集団経済、地域の記憶、集団の土地の果たす役割などに着目し、中国全土でチームを組み、村の奥深くまで入って調査を行ってきた。私自身、彼らの調査手法や観察眼から学ぶことが多く、大いに啓発されてきた。しかし、彼ら中国の研究者も中国社会のコンテキストの中に存在していることには注意しなければならないと、私は常々感じてきた。例えば、賀雪峰はいわゆる「新左派」に属し、毛沢東時代の集団経済の現代の中国農村への影響を肯定的に捉える傾向がある一方で、文化大革命期や大躍進期の農村で引き起こされた問題にはほとんど関心を示さない。一方、リベラル知識人とされる清華大学の郭于華や秦暉は、戸籍制度や出稼ぎ労働によって農民が搾取されてきた側面に関心を向ける(郭于華2013、秦暉2014など)。田原が本書で取り上げる文献には、リベラル知識人のものがほとんど含まれていない。

中国の言論空間をよりバランスよく見渡すことができれば、終章のまとめももう少し違ったものになったのではないだろうか。田原は、農民は「脱政治化」しており、「政治と経済の断層」という中国政治社会の特質を捉えれば、「農民にとっては経済の開放こそが重要であり、広い意味での政治的権利の制限や言論面での引き締め強化は目下のところ、痛くも痒くもない」(p.240)と述べているが、このような説明は引き締めの対象となっている人たちの声を聞いてきた私にとって、読むのがつらいほどであった。私が研究の対象としているのは陳情者や労災の被害者、強制立ち退きに抵抗する人たちなど社会的弱者、或いは彼らを支援する人権派弁護士などであり、一般的な中国の農民ではないと言われるかもしれないが、では、一般的な農民とはどのような人たちなのか。広大で多様な中国農村の特質を明らかにするのは容易なことではない。特に、フィールドワークなど質的研究における描写には、細やかな配慮が必要になる。

さらにもう一つ、本書に欠けていると思われるのが、ソーシャルメディアの分析である。新型コロナの感染拡大もあり、ここ3年現地での調査はまったくできていないが、それにもかかわらず、私は日々、中国の農民や弁護士たちと頻りにやりとりしている。家族や親族、友人たちとのやり取りはもちろんのこと、問題を抱える人たちはクリスチャンのグループを微信(中国版LINE:ウィチャット)で作り、毎日お祈りをして互いに励まし合っ

いるし、ビジネスのための資金の調達も、病気治療のための募金活動もソーシャルメディアを使っている。こうしたつながりは血縁も地縁も、国境をも超えた広がりをもっている。

本書が出版されて3年経つが、私の元に書評の依頼が来たのは今回が初めてだ。内心、依頼が来なくてホッとしていた。私がこの本の書評を書くためには、自分と向き合う必要が出てくる。私は中国で農村調査も行ってきたが、農村研究に特化してきた田原ほど全面的には研究できていない。田原がやっているようなインドやロシアの農村との比較研究もやったことがないし、何よりも、ここ数年は中国の言論統制が厳しくなる中で、フィールドワークを行う気力も意欲も萎えてしまい、農村研究からはだいぶ身をひいている。だから、私に田原が力を入れてきた研究を批評する資格はないと思ってきた。今回、自ら欠けているものを晒し出す結果になるとわかっていながらも書かせてもらったのは、エスノグラフィを学んできた私にとっては、自分が見えていない部分を見出すことが重要だからだ。読者から批判をいただいて、また新たな研究に励んでいきたい。

参考文献

- 阿古智子 (2018) 「アウトロー空間としての城中村」『現代中国研究』第 40 号、40-54 頁。
- 阿古智子 (2014) 『貧者を喰らう国』新潮選書。
- 郭于華 (2013) 『受苦人的講述：驢村歴史と——種文明的邏輯』香港中文大学出版社。
- 賀雪峰 (2017) 『南北中国——中国農村区域差異研究』北京：社会科学文献出版社。
- LeCompte, M. D., Preissle, J. and Tesch, R. (1992) *Ethnography and Qualitative Design in Educational Research* (Second Edition). San Diego: Academic Press Inc.
- 秦暉、金雁 (2014) 『農村公社、改革与革命』東方出版社。
- 譚玲麗 (2020) 「余干県第二中学留守児童調査報告」(<https://www.renrendoc.com/paper/102750981.html>) 2020 年 11 月 16 日。

■ 評者紹介

- ①氏名(ふりがな): 阿古智子(あこ・ともの)
- ②所属: 東京大学総合文化研究科
- ③出身地: 大阪府
- ④専門分野・地域: 社会学・中国(香港、台湾も)
- ⑤学歴: 博士(Ph.D.) 教育学
- ⑥職歴: 姫路獨協大学准教授、学習院女子大学准教授、早稲田大学准教授を経て東京大学准教授、現在教授
- ⑦現地滞在経験: 長期で滞在したのは1996-1998(香港)、1998-1999(上海)、1999-2000(香港)、2001-2003(北京)
- ⑧研究手法: 質的調査法(参与観察、インタビュー)
- ⑨研究上の画期: 香港大学に留学しエスノグラフィを学んだ時と、中国の内蒙古自治区で中国のジャーナリストと調査中に地元当局に取り調べを受けた時に視野が大きく広がった。
- ⑩推薦図書: ベネディクト・アンダーソン(2009)『ヤシガラ椀の外へ』加藤 剛(翻訳)、NTT出版